

## 隠し文学館 花ざかりの森

### 三島由紀夫、同世代作家らへのメッセージ

#### —北杜夫へ—

#### 北杜夫プロフィール

北 杜夫（きた もりお、本名：斎藤 宗吉（さいとう そうきち）

一九二七年(昭和二年)五月一日— 二〇一一年(平成二十三年)一〇月二四日。日本の小説家、エッセイスト、精神科医、医学博士。祖父は医師で政治家の斎藤紀一。父は紀一の養子で、歌人で医師の斎藤茂吉。兄はエッセイストで精神科医の斎藤茂太。娘はエッセイストの斎藤由香。

北杜夫という筆名は、青年時代、杜の都、仙台の東北大学に学んだので、“北の杜の都”に因んで命名したものという。またトーマスマンに心酔し、彼の「トニオ・クレゲル」に魅かれ、〈北杜二夫(トニオ)〉としたが馴染まず、〈二〉を省いて〈北杜夫〉としたともいわれている。

#### 三島由紀夫と北杜夫の出会い

北杜夫は、三島由紀夫とほぼ同年代である。しかし、北自身は自分より二歳しか年長でないのに作家としてキャリアが長い三島を、どこか恐れ多い存在と見なしていたようだ。「ずっと以前から、三島さんはぜんぜん別世界の住人とも思える確乎とした作家であった」と述べている。

#### 北杜夫の証言(抜粋)

奥野健男氏の出版記念会に行った折、そのあとの二次会の店へゆくタクシーの中で、たまたま三島さんと奥野さんと私が同乗した。

そのときの私には、雲の上の人と感じられる三島さんに対する、若者の無鉄砲な気負いのようなものがあつたことは争えない。(三島さんが太宰治氏に会いに行ったときも、次元はまったく異なるが、それに通ずる気負いはあつたと思われる。)車の中で、私は三島さんに、

『仮面の告白』にてふどと書かれているが、あれはやはりちやうどでしょう」と言った。それだけならいい、酔いと目くらみのなせるわざで、  
「少しは辞書を引いてください」

と、確かに言ってしまったのだ。そのとき三島さんは、  
「しかし君、江戸時代の謡曲やなんかにてふどとちゃんと出ているよ」  
という意のことを言った。私はギクリとしたけれど、あとで少し調べて、  
「江戸時代は文法がひどく乱れています。やはり、今の旧仮名遣いなら、てふどはちやうど……」  
という意のハガキを送った。もとより返事はなかった。

※ ()、・・・は原文のまま

「人間とマンボウ」一九七二(昭四七)年十一月二〇日・中央公論社刊より

### 奥野健男の証言(抜粋)

昭和三十一年三月十七日、ぼくの処女評論である『太宰治論』の出版記念会が虎ノ門の共済会館でひらかれ、九十人ぐらいの出席があった。

三島由紀夫は出雲橋のはせ川での二次会にも出席したが、その折まだ無名だった北杜夫が、「三島さんはある本に『てふど』と書いているが、あれは『ちやうど』でしょう。辞書ぐらい引いて下さい」などとからんだ。三島は余程腹がたったらしく、夜中の二時に電話をかけて来て、「君は『幽霊』とかを書いた天才というが、あんな無礼な文学青年を二度と紹介しないでくれ、なにが『ちやうど』だ」としきりに怒っていた。いかにも負けずぎらいの三島由紀夫らしかった。

「三島由紀夫伝説」一九九三(平五)年二月二〇日・新潮社刊より

### 北杜夫 略年譜 一三島由紀夫との関連を含めて一

#### 一九二七年(昭和二年)

五月一日、東京市赤坂区青山南町(現在の東京都港区南青山)に、母・斎藤輝子、父・茂吉の次男として生まれた。本名は斎藤宗吉。兄弟には、十一歳年上の兄・茂

太と、姉一人、妹一人がいる。生家は母・輝子の実父・斎藤紀一が創設した精神病院「青山脳病院」であった。

#### 一九三三年（昭和八年）六歳

十一月、「不良華族事件(ダンスホール事件とも)」。輝子の行状が新聞などで取り上げられ、家族と別居する。

#### 一九三四年（昭和九年）七歳

宗吉、青南小学校に入学する。

#### 一九三九年（昭和一四年）一四歳

一月、腎炎を患い、三学期を全休。布団のなかで昆虫図鑑を読みふける。

#### 一九四〇年（昭和一五年）一三歳

四月、麻布中学校に入学。課外活動で理科学部博物班に入り、一年先輩の奥野健男と出会う。

#### 一九四四年(昭和一九年)一七歳

三月、旧制松本高校を受験するも、不合格。一旦は東京帝大臨時付属医専に入学したが、高校生活への憧れで麻布中学五年に復帰する。その後、大森の軍需工場に動員される。

#### 一九四五年（昭和二〇年）一八歳

一月、松本高校の理科乙類に合格する。

五月、東京大空襲により自宅が全焼する。

六月、松本高校の思誠寮に入寮。上級生の辻邦生と出会う。

八月の入学式を経て、大町のアルミ工場に動員されたところで終戦を迎える。

#### 一九四六年（昭和二十一年）一九歳

三月、二年生に進学。生涯の恩師・望月市恵教授と親しくなり、トーマス・マンの著作を紹介される。

#### 一九四七年（昭和二十二年）二〇歳

この頃より詩作を開始する。寮歌の募集に応募し、入選を果たす。

#### 一九四八年（昭和二十三年）二一歳

四月、東北大学医学部に入学。夏休みを父と箱根強羅の別荘で過ごす。「文学集団」に投稿した詩が野村四郎選の詩欄に掲載される。

#### 一九四九年（昭和二十四年）二二歳

四月、二年生となり、松本高校の後輩が入学してくる。将棋、卓球、野球、ダンスなどに熱中する。

一九五〇年（昭和二五年）二三歳

同人誌「文藝首都」四月号に「百蟻譜」が「北杜夫」の名前で掲載される。後に北は同誌の同人となる。

一九五二年（昭和二七年）二五歳

三月、東北大学医学部を卒業。同大学の付属病院にて、インターン実習に入る。

一九五三年（昭和二八年）二六歳

二月二五日、茂吉が心臓喘息のため、この世を去る。

五月、慶応大学医学部神経科の教室助手となる。この頃は兄の家に居候していた。

六月、医師国家試験に合格する。

一九五四年（昭和二九年）二七歳

一〇月、「幽霊」を自費出版。

一九五五年（昭和三〇年）二八歳

一二月、山梨県立玉緒病院(当時)に派遣される。

一九五六年（昭和三十一年）二九歳

一月、奥野健男の紹介により「近代文学」誌上に「岩尾根にて」を発表。

三月一七日、奥野健男の紹介で初めて三島由紀夫に会う。

「文藝首都」七月号に掲載したSF作品「人口の星」が芥川賞の候補に挙がる。

一二月、医局に戻る。

一九五七年（昭和三二年）三〇歳

「文藝首都」六月号に掲載した「狂詩」が芥川賞の候補になる。

一〇月、田畑麦彦、佐藤愛子らと同人誌「半世界」を創刊する。

一九五八年（昭和三十三年）三一歳

一一月、調査船「照洋丸」に船医として搭乗、東京港から出港する。

一九五九年（昭和三四年）三二歳

四月末、半年の航海を終え、帰国。

「新潮」（新潮社）二月号掲載の「谿間にて」で三たび芥川賞の候補になる。帰国後、十二指腸潰瘍を病み、医局を休む。

一九六〇年（昭和三五年）三三歳

三月、中央公論社より「どくとるマンボウ航海記」を刊行。本作は元々「船上にて」という題名で同人誌「文藝首都」上に掲載された随筆だったが、中央公論社の編集者であった宮脇俊三が高く評価し、氏の誘いを受け、推敲することで「どくとるマンボウ航海記」として完成した。以降、「マンボウ」が北の別称となった。

六月、「夜と霧の隅で」を新潮社から刊行。

七月、「夜と霧の隅で」で第四十三回芥川賞を受賞。

九月、「幽霊」を中央公論社より刊行。

学位論文「精神分裂病における微細精神運動の一考察」で医学博士となる。

#### 一九六一年（昭和三十六年）三四歳

一月に医局を辞し、兄・茂太の医院を手伝うようになる。

四月三日、横山善美子と三井クラブで結婚式を挙げる。三島由紀夫夫妻が出席する。

六月 三島由紀夫が「どくとるマンボウ結婚記」を「婦人画報」に発表。

一〇月には世田谷区松原に転居。中央公論社より「どくとるマンボウ昆虫記」を発表する。

一〇月二〇日、三島由紀夫が「一昆虫記」献本の礼状(葉書)を書く。

一二月、南太平洋取材に出発。

#### 一九六二年（昭和三十七年）三五歳

一月末に帰国。

四月に長女・由香が誕生する。

五月一六日、三島由紀夫が、海外取材旅行土産品の礼状(葉書)を書く。

六月一日、三島由紀夫が、「新潮」連載中の「楡家の人びと」を葉書で好評する。

一二月一三日、三島由紀夫が、北杜夫からの父・斎藤茂吉の著書献本の礼状(葉書)を書く。

#### 一九六三年（昭和三十八年）三六歳

一月二四日、三島由紀夫が「楡家の人びと」第二部着手激励の葉書を書く。

二月一九日、三島由紀夫が自邸での晩さん会(三月八日)に招く手紙(英文)を書く。

#### 一九六四年（昭和三十九年）三七歳

三月六日、三島由紀夫が磯田光一宛の手紙で、北杜夫の「楡家の人びと」に触れる。

三月二六日、三島由紀夫がドナルド・キーン宛の手紙で、北杜夫「楡家の人びと」を好評する。

四月、大河小説「楡家の人びと」を新潮社より刊行。三島由紀夫が函に推薦文を載せる。

九月一日、三島由紀夫が、大江健三郎との「現代作家はかく考える」という「群像」誌上対談で「楡家の人びと」に触れる。

一一月、同作により第十八回毎日出版文化賞を受賞。

一一月三〇日、三島由紀夫が自邸でのクリスマス・パーティ(一二月二二日)に招く

手紙(英文)を書く。

#### 一九六五年(昭和四〇年) 三八歳

一月一日、三島由紀夫が、伊藤整、本多秋五との「戦後の日本文学」という「群像」誌上座談会で北杜夫に触れる。

一月一日、三島由紀夫が、「現代文学の三方向」という「展望」の評論で「楡家の人びと」に触れる。

五月、京都府山岳連盟の西部カラコルム・ディラン峰登山隊に医師として参加。

一二月八日、三島由紀夫が自邸でのクリスマス・パーティ(一二月二二日)に招く手紙(英文)を書く。

#### 一九六六年(昭和四十一年) 三九歳

四月、最初の躁状態となる。

七月一六日、三島由紀夫が「天井裏の子供たち」献本の礼状(封書)を書く。

一一月、ディラン峰での経験を基にした「白きたおやかな峰」を新潮社より刊行。

#### 一九六七年(昭和四二年) 四〇歳

八月二〇日、三島由紀夫が「白きたおやかな峰」の読后感想の手紙(原稿用紙)を書く。

#### 一九六八年(昭和四三年) 四一歳

三月、松本、仙台時代の生活を描いた「どくとるマンボウ青春期」を中央公論社より刊行。

四月、アメリカ国務省の招待でアメリカを回る。

年末には鬱が重くなり、日々ほとんどを眠って過ごすようになる。

#### 一九六九年(昭和四四年) 四二歳

七月に躁状態のまま、アポロ十一号打ち上げの取材にアメリカへ発つ。

九月、「さびしい王様」を新潮社より刊行。

#### 一九七〇年(昭和四五年) 四三歳

一一月、三島由紀夫の自刃事件で衝撃を受け、深い鬱に陥り、一カ月半ほど寝てばかりの状態となる。

#### 一九七二年(昭和四七年) 四五歳

四月、「酔いどれ船」を新潮社より刊行。

#### 一九七四年(昭和四九年) 四七歳

五月、遠藤周作との共著「狐狸庵VSマンボウ」を講談社より刊行。

#### 一九七五年(昭和五〇年) 四八歳

六月、「幽霊」の続編「木精」を新潮社より刊行。

九月、ソ連作家同盟の招待により、星新一らとソビエト連邦を訪問する。

#### 一九七六年（昭和五一年）四九歳

一月、「どくとるマンボウ追想記」を中央公論社より刊行。

九月、新潮社より北杜夫全集(全十五巻)刊行が始まる。大変な躁状態に陥り、株取引に熱中。大損害を被る。

#### 一九八一年（昭和五六年）五四歳

一月、世田谷の自宅を「マンボウ・リューベック・セタガヤ・マブセ共和国」として独立宣言。

二月には園遊会である「文華の日」を催し、多数の文化人を招待した。

#### 一九八二年（昭和五七年）五五歳

一月、「輝ける碧き空の下で」を新潮社より刊行。

#### 一九八四年（昭和五九年）五七歳

一二月一六日、母・輝子が胆嚢腫瘍により死去。

#### 一九八五年（昭和六〇年）五八歳

躁となり、一一月に第二回「文華の日」を催す。

#### 一九八六年（昭和六一年）五九歳

一月、「輝ける碧き空の下で」第二部を新潮社より刊行。同作により、第十八回日本文学大賞を受賞した。躁となり、夏の軽井沢で株取引に熱中。

一〇月には第三回「文華の日」を開催。

#### 一九八九年（平成元年）六二歳

九月、都内の画廊にて「世紀の北杜夫の書並びに絵画展」を開催。

#### 一九九一年（平成三年）六四歳

六月、父・茂吉について描いた「青年茂吉」を岩波書店より刊行。

#### 一九九三年（平成五年）六六歳

一月、「どくとるマンボウ医局記」を中央公論社より刊行。

七月には、「壮年茂吉」を岩波書店より刊行。

#### 一九九四年（平成六年）六七歳

五月、「母の面影」を新潮社より刊行。

#### 一九九六年（平成八年）六九歳

三月、「茂吉彷徨」を岩波書店より刊行。

一二月、日本芸術院会員に選出される。

一九九八年（平成一〇年）七一歳

三月、「茂吉晩年」を岩波書店より刊行。

一九九九年（平成一一年）七二歳

一月、「茂吉」評伝四部作により、大佛次郎賞を受賞。

二〇〇〇年（平成一二年）七三歳

九月、世田谷文学館において「北杜夫展」が開催される。

二〇〇二年（平成一四年）七五歳

七月、軽井沢高原文庫にて「北杜夫展」が開催される。

二〇〇八年（平成二〇年）八一歳

四月、日光で「どくとるマンボウ昆虫展」開催。

二〇一一年（平成二三年）八四歳

一〇月二三日、昼食をとった後、救急車で東京医療センターに搬送される。

翌二四日、腸閉塞により死去。享年八四歳。

#### ※参考資料

「北杜夫展」（世田谷文学館・二〇〇〇年）

「決定版 三島由紀夫全集」第四二巻・年譜（新潮社・二〇〇五年）

「北杜夫・マンボウ文学読本」（宝島社・二〇一六年）ほか

三島の「白きたおやかな峰」に対する、雑誌に発表すべく書かれた「アプローチ」と題する批評文の手紙を最後に、三島からの通信は途絶えている。

北は、この「アプローチ」を「最後のかたじけない手紙」とし、『『白きたおやかな峰』』についての批評の中で、「いちばん私が胸に応えたもので」と後年述べている。

#### 三島から北への手紙など(抜粋)

二人の出会いから「白きたおやかな峰」の批評文に至るまでの軌跡を、三島の年譜からたどる。

一九五六年（昭和三一年）

三月一七日（土）、北は奥野健男の紹介で初めて三島由紀夫に会う。

## 一九六一年（昭和三六年）

四月三日（月）、北は横山善美子と三井クラブで結婚式を挙げる。三島由紀夫夫妻が出席する。

六月 三島由紀夫が「どくとるマンボウ結婚記—北杜夫さんおめでたう」を「婦人画報」に発表。

ムニャムニャ何だかたよりないことを言ひながら、その間にちやんと言ひたいことを直言してゐるといふ北氏の性格は、私などと比べて、ずいぶん得だと羨望に堪えない。

北氏がこれからも家庭で、ムニャムニャ言ひながらマンガウを読んでる図を想像するのは愉快だが、一言警告しておく、家庭といふところはふしぎな厳密性を帯びた場所であつて、ここでは巧緻を極めたミスティフィケーションもしばしば破られる。氏の今までのすべてがミスティフィケーションだとは言はないが、世間では裸で通用してゐるものが、家庭ではさらに皮を剥がれる目に会ふことも覚悟しておいたほうがよろしい。

一〇月二〇日（金）、三島由紀夫が「—昆虫記」献本の礼状（葉書）を書く。

今日は又、小生に「昆虫記」を頂戴、厚く御礼申し上げます。小生糞コガネに特に興味あり、早速その項目から読みはじめました。（神聖な糞虫）ファーブルでも、この虫のところが一番面白いやうですね。

## 一九六二年（昭和三七年）

五月一六日（水）、三島由紀夫が、海外取材旅行土産品の礼状（葉書）を書く。

頂戴した品に潮風を嗅いで、もう一度古き詩心を胸に蘇らせたきもの也。又お目にかゝりたく。

六月一日（月）、三島由紀夫が、「新潮」連載中の「楡家の人びと」を葉書で好評する。

貴兄の「楡家の人びと」今月号も拝読しました。快調で、実に愉しく読みました。桃子といふ少女は、何といふ可愛い、魅力のある少女でせう。小生はこの子が可愛くてたまらずどうか彼女が将来不幸にならぬやうに祈らずにはゐられない。

一二月一三日（木）、三島由紀夫が、北杜夫からの父・斎藤茂吉の著書献本の礼状（葉書）を書く。

（献本の御礼ののち）

「楡家の人々」の御完成を心からお祈りしてゐます。時々進行中に必ず憂鬱症

状になりますから、そのときは三島医院の門をお叩き下さい。

#### 一九六三年（昭和三八年）

一月二四日（木）、三島由紀夫が「楡家の人びと」第二部着手激励の葉書を書く。

「楡家の人々」第二部に着手の由、それまでの部分の重苦しさは小生にも多々憶えのあるところ実によくわかります。軽薄なる文壇に負けず、重厚なる御仕事を続行されることを心から祈つてをります。

二月一九日（火）、三島由紀夫が自邸での晩さん会（三月八日）に招く手紙（英文）を書く。

#### 一九六四年（昭和三九年）

三月六日、三島由紀夫が磯田光一宛の手紙で、北杜夫の「楡家の人びと」に触れる。

三月二六日、三島由紀夫がドナルド・キーン宛の手紙で、北杜夫「楡家の人びと」を好評する。

ちかごろの小説では、北杜夫氏が「楡の人々」いふ大長篇を書いたのが、小生は大へんいい仕事だと思つてみますが、日本は目下どうも歴史小説が歓迎されてをり、野上弥生子さんの「秀吉と利休」がほめられてみます。小生はどうも、歴史小説といふものを好きません。現代のことを書けばアラが見えるのが当たり前ですが、歴史小説だとどうしてもアラが隠れるからです。

四月五日、大河小説「楡家の人びと」を新潮社より刊行。三島由紀夫が函に推薦文。

戦後に書かれたもつとも重要な小説の一つである。この小説の出現によつて、日本文学は、真に市民的な作品をはじめて持ち、小説といふものの正統性を証明するのは、その市民性に他ならないことを学んだといへる。

これほど巨大で、しかも不健全な観念性をみごとに脱却した小説を、今までわれわれは夢想することもできなかつた。

あらゆる行（ぎやう）が具体的なイメージによって堅固に裏打ちされ、追憶の中からすさまじい現実が徐々に立上るこの小説は、終始楡一族をめぐつて展開しながら、一脳病院の年代記が、つひに日本全体の時代と運命を象徴するものとなる。しかも叙述にはゆるみがなく、二千枚に垂（なんな）んとする長篇が、尽きざる興味を以て読みとほすことができる。

九月一日、三島由紀夫が、大江健三郎との「現代作家はかく考える」という「群像」誌上対談で「楡家の人びと」に触れる。

十一月三〇日、三島由紀夫が自邸でのクリスマス・パーティ（一二月二二日）に招く手紙（英文）を書く。

## 一九六五年（昭和四〇年）

一月一日、三島由紀夫が、伊藤整、本多秋五との「戦後の日本文学」という「群像」誌上座談会で北杜夫に触れる。

一月一日、三島由紀夫が、「現代文学の三方向」という「展望」の評論で「楡家の人びと」に触れる。

（大江健三郎の「個人的な体験」、安部公房の「他人の顔」を論じたあと）

北氏が精神科の医師でもあることは、内面性に対する精神の節度を保ちえた一つの原因とも思われ、氏の手はカロッサのやうに、むしろ物事を癒やすのである。

前二作と比べてすぐ目につく相違は、あの二作がそれぞれ緻密な、神経質な、芸術上の実験を意図してゐて、それが窮屈な印象を与へかねないのに反して、「楡家の人びと」は、もちろん精密な計算に基いた大作ではあるけれど、のびのびした、むしろ奔放自在な印象を与へることである。あの二作が冷たいシャワーであるなら、この作品は、楡基三郎が愛したあの巨大な「ラジウム風呂」のやうに温かい。

一二月八日、三島由紀夫が自邸でのクリスマス・パーティ(一二月二二日)に招く手紙(英文)を書く。

## 一九六六年（昭和四一年）

七月一六日、三島由紀夫が「天井裏の子供たち」献本の礼状(封書)を書く。

「白毛」のをはりの小さいお嬢さんの件りにこころを動かされ、貴兄は小さい女の子のことを書かれると、(楡家の桃子以来)、どうしてこんなに人の心をゆすぶるのか、とふしぎになりました。「静謐」でも千花といふ子が妙に感動的なのです。これは決して私小説的批評ではありません。貴兄と小生の間に、「小さい女の子の孤独」に対する妙に深い哀憐の情の共通性があるらしい。小生の場合は、死んだ妹の記憶かもしれません。

## 一九六七年（昭和四二年）

八月二〇日、三島由紀夫が「白きたおやかな峰」の読后感想の手紙(原稿用紙)を書く。

(「文学界」の依頼で書いた原稿だが、第三者に読ませるより貴兄一人だけに読んでいただくべきと前置きして)

北杜夫氏の「白きたおやかな峰」を読んでいて、私はたびたびアプローチといふ英語を思ひ出した。山岳小説といふばかりではない。小説といふものは、

何に向かつてアプローチするものなのか、といふ問題が、これを読んでいる間、私の頭を離れなかつたのである。

この小説の後半は、その迫力、そのクライマックスの凄絶さにおいて、見事の一語に尽きる。読んでみて胸がドキドキしてくる。登山隊に思わず声援を送りたくなる。自分も一緒に登りつつあるつもりで、両手を崖へかけてあるやうな気分になる。標高差わづか七、八十メートルのところまで来て、

「しかも、そのまろやかな山頂、その右端がきらりと輝いた。純白なうえにも眩ゆく、玲瓏と輝いた」

といふところは、ディランといふ山の女性的な魔性をみごとに表現している。

しかしそれが文学的感動かといふと、どうもさうも云ひきれないものが残るのが、この作品の疑問点である。ここまで来ると、山が文学的象徴として高まつてあるといふではなくて、文学の代りに山が代置されてあるやうな疑ひが起きて来る。

#### 一九七〇年（昭和四五年）

十一月、北杜夫は三島由紀夫の自刃事件で衝撃を受け、深い鬱に陥り、一カ月半ほど寝てばかりの状態となる。

#### ※参考資料

「北杜夫展」（世田谷文学館・二〇〇〇年）

「決定版 三島由紀夫全集」第四二巻（新潮社・二〇〇五年）年譜

「北杜夫・マンボウ文学読本」（宝島社・二〇一六年）ほか

#### 三島由紀夫、同世代作家へのメッセージ

##### 一序文・推薦文、帯紙宣伝文など一

北杜夫は、三島の「楡家の人びと」に対する、「貴重」な「極上」の、「その見事な推薦文のために本も売れたにちがいない」と述べている。

三島の主な推薦文をたどり、同世代作家に向けた眼差しの軌跡を追う。（※「歳」は三島の年齢）

#### 一九四九年（昭和二四年）二四歳

- 二月二〇日 坊城俊民「末裔」(草美社)・跋
- 一九五六年(昭和三一年)三一歳
- 二月五日 吉村貞司「三島由紀夫」(東京ライフ社)・カバー
- 一九五九年(昭和三四年)三四歳
- 十一月三〇日 深沢七郎「東京のプリンスたち」(中央公論社)・推薦の言葉(帯)
- 一九六〇年(昭和三五年)三五歳
- 一月一〇日 坂上弘「ある秋の出来事」(中央公論社)・推薦のことば(帯)
- 七月一五日 石原慎太郎「新鋭文学叢書8石原慎太郎集」(筑摩書房)・解説
- 九月一日 春日井健「未成年」(作品社)・序
- 一〇月一五日 庄野潤三「生物」(講談社)・帯
- 一九六三年(昭和三八年)三八歳
- 二月二八日 ドナルド・キーン「日本の文学」(筑摩書房)・解説
- 一九六四年(昭和三九年)三九歳
- 四月五日 北杜夫「楡家の人びと」(新潮社)・函(再掲)
- 一九六六年(昭和四一年)四一歳
- 九月三〇日 池田幸太郎・譯「聖セバスチヤンの殉教」(美術出版社)・共譯
- 十一月二三日 矢頭保「写真集「体道」」(ウェザヒル出版社)・序
- 一九六七年(昭和四二年)四二歳
- 四月発売 浅野晃「ポエムジカ「天と海」」(日本コロムビア)朗読、推薦文、LPジャケット題字
- 十一月三〇日 安部公房「戯曲「友達・榎本武揚」」(河出書房新社)・帯(谷崎賞選後評より)
- 一九六八年(昭和四三年)四三歳
- 九月二〇日 丸山明宏「紫の履歴書」(大光社)・序、帯
- 一九六九年(昭和四四年)四四歳
- 四月三〇日 大場正史・訳「新千夜一夜物語2」(桃源社)・帯
- 一九七〇年(昭和四五年)四五歳
- 一月二〇日 マイケル・ギャラガー「爆弾と銀杏」(講談社)・帯
- 三月五日 小高根二郎「蓮田善明とその死」(筑摩書房)・序
- 五月一日 堂本正樹「菊と刀」(思潮社)・序
- 七月一〇日 田中光子「わが手に消えし霞」(牧羊社)・序文
- 七月二〇日 平岡瑤子/松原文子「ちっちゃな淑女たち」(小学館)・監修

九月九日 中村哲郎「歌舞伎の幻」(前衛社)・序  
九月二〇日 澁澤龍彦「澁澤龍彦集成 第Ⅶ巻」・帯  
十一月三〇日 宮崎清隆「憲兵」(創思社)・序文  
一二月二五日 沼庄三「家畜人ヤプー」(都市出版社)・帯

一九七一年(昭和四六年) 没後一年

一月三〇日 細江英公「新輯版薔薇刑」(集英社)被写体・序・題簽  
三月三〇日 東文彦「東文彦作品集」(講談社)・序  
五月一日 細江英公「写真集「抱擁」」(写真評論社)・序、帯(遺稿)  
十一月一五日 印南清「馬術読本」(中央公論社)・序及び装本

一九八八年(昭和六三年) 没後一八年

一〇月三〇日 井上武彦「同行二人」(星雲社)・絶賛と帯に表示

一九八九年(平成元年) 没後一九年

二月一六日 藤島泰輔「孤独の人」(文藝春秋)・序

こうして列挙すると、没年の昭和四十五年に推薦文が集中していることに気付く。  
ここでも、書き残して置きたいと思った三島の誠実な思いが伝わってくる。

(館長 杉田欣次)

全国文学館協議会 紀要13号(2020年3月31日)寄稿

※「紀要」は縦書きですが、都合により横書きにしてあります。